

Title	<紹介>伊井春樹著『小林一三の知的冒険 宝塚歌劇を生み出した男』
Author(s)	福田,涼
Citation	語文. 2017, 108, p. 111-112
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71015
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

伊井 春樹著 『小林一三の知的冒険 宝塚歌劇を生み出した男』

福 \mathbb{H} 涼

にタイトルと大まかな内容を紹介することで、本書を概観したい きた人間小林一三」(二百四十頁)の実像である。まずは章ごと 林ではなく、従来あまり知られていなかった「文化的な世界に生 的冒険」と銘打たれた本評伝が開示するのは、 劇団の生みの親として広く認知されている。一方で、 *林一三といえば、 阪急グループの創始者であり、 実業家としての小 書題に また宝塚歌 一知

子との交流(小林の長男は彼女に因んで富佐雄と名付けられた) 活き活きと描き出される。 彼の人となりに大きな影響を与えたという。 実孫のように小林を愛した大叔母・房

後年に記された未発表の随想などをもとに、少年期の小林の姿が

韮崎小学校から成器舎へ」では、新出の日誌や出納帳、

じられる一章である。

各種の演説会や機関誌の編集に勤しむ充実した学生生活の実態が は、 動を伝える。現存の三田演説館が象徴するように、 示されている。 「二 東京での新生活」 各地各所で演説が熱く繰り広げられた弁論の時代であった。 は、主として慶應義塾時代の小林の活 彼の入塾当時

した 筆活動に光を当てる。 練絲痕」 小説家の夢」は十七歳のときに (明治二十三年)を嚆矢とする彼の旺盛な小説執 慌ただしい銀行員生活を送りつつ、 「山梨日日新聞」に連載 小林は

> 出 山

いう。 術をこよなく楽しみ、人を大切にした精神」(百四十一頁) きに関する逸話には殊に心を打たれた。小林の「文学を愛し、 の人生を、 まえ「四 掘されたといってよい。一文学青年の成長史としても示唆に富 題を含め、従来の近代文学研究が見過ごしてきた一連の鉱脈 小説家への夢を失わなかった。小説が掲載された媒体や人脈 さて、小林は草稿を含めると三千句ばかりの俳句をつくったと 和歌や漢詩、 俳句への傾倒」は、学生時代から戦後に至るまでの彼 俳句を切り口として描出してみせる。 狂歌の類も数多く残されている。これらを踏 原爆句の切り が が発 抜 問

0

林自身の体験や都市論が如実に反映されてもいるという。 芸妓の生きざまや大阪の風俗を描く小説として企図されつ た未発表の小説原稿に対して実証的な分析が施されている。 有馬電気軌道株式会社を創立した後に書かれた「上方是非録」 <u>T</u>i. 「上方是非録」による大阪文化」では、 筐底に残されてい つ、 箕面 は

後版の刊行をめぐる錯綜した事情については、 識がより明確に打ち出されることとなった。 込まれた「上方是非録」に対し、本作では物語としてのテー けている。芸妓論や花街論、 論じられる『曾根崎艶話』の出版へとつながったと著者は位置づ こうした「習作」の存在が、「六 『曾根崎艶話』の執筆」 .版されている。 一書店から刊行され、戦後には 紙幅の都合上、 あるいは都市開発計画までもが織り 「紅梅の蕾」 詳述することは叶わないが、 を付加 本書は大正五年に籾 たしかにあれこれ した再版 本が -マ意

街への哀惜の念が、戦後の再版につながったという。れ得ず焦土と化し、また次第に失われてゆきつつあった大阪の花と「考えをめぐらしたくもなってくる」(百九十三頁)。戦禍を免

「七 文化人との交流の様子が詳しく述べられている。 て、文化人との交流の様子が詳しく述べられている。 な化人との交流のが、 では、主として絵画や俳画帳の蒐集など、小林の風流人としての側面が浮き彫りにされる。新進・中堅と、小林の風流人としての側面が浮き彫りにされる。新進・中堅と、小林の風流人としての側面が浮き彫りにされる。新進・中堅と、小林の風流人としての側面が浮き彫りにされる。新進・中堅という。このほか俳幅や俳画帳の現集など、文化人たちの交流の様子が詳しく述べられている。

なき憧憬を抱き続けた小林一三の八十四年の生涯は、昭和三十二なき憧憬を抱き続けた小林一三の八十四年の生涯は、昭和三十二なき憧憬を抱き続けた小林の動静を物語る。第二次近衛文麿内閣の商後、そして晩年の小林の動静を物語る。第二次近衛文麿内閣の宿工大臣など国政の要職を歴任。昭和二十一年三月に公職追放の指工大臣など国政の要職を歴任。昭和二十一年三月に公職追放の指工大臣など国政の要職を歴任。昭和二十一年三月に公職追放の指工大臣など国政の要談を表表して、

りがなされている。企業経営者としての小林一三が世の趨勢に敏れの時期や時代における社会や文化、風俗のありようにまで目配の文化的な営為を辿ることに主眼が置かれつつも、つねにそれぞ以上の拙い要約からでも了解されるように、本書では小林一三

年一月二十五日に幕を下ろすこととなる。

代の層が浮き彫りとなり、また時代を語ることで彼の文化的な諸の「知的冒険」においても貫徹されていた。小林を語ることで時感であり続けたことは周知のとおりであるが、こうした姿勢は彼

活動がより明確に意義づけられてゆく。

著者自身も記しているように、多面体である小林のすべてを一書にまとめることは容易でなかろうが、本書においては、小説にしても俳句にしても、彼の企業人としての側面との有機的な接続しても俳句にしても、彼の企業人としての側面との有機的な接続がはかられている。章を追うごとに各所の叙述や考証が輻輳され、がはかられている。章を追うごとに各所の叙述や考証が輻輳され、か説に書がは基づく考証によって先行の評伝や年譜の補填や訂正がなった。

(ふくだ・りょう 本学大学院博士後期課程)(本阿弥書店、二〇一五年六月、二四一頁、二〇〇〇円+税)伝は、新たな「知的冒険」への誘いの書にほかならないのだ。小林一三の生涯を通じた「知的冒険」のありように鋭く迫る本

評